

生徒会誌原稿 残り30日 その5

「磐城高校の新時代へ」

磐城高等学校長 阿部武彦

私たちの世代は、昭和20年第二次大戦敗戦の後、戦後の混乱と貧しさの中から、何とか生き残った父と母が家族の大切さの印として子供を授かった、その子供の世代である。人の力を基礎に、人のつながりを取り戻していく事が新しい社会となるという理想のもとに、親族を含め家を中心にして地域ともつながりを持ちながら、その延長での学校でのつながりの中で、成長し連携し切磋琢磨を自然と心がけた世代である。

昭和50年、高度経済成長期の最後、私たちは高校生になった。常磐炭田による繁栄は、もはや過去の出来事だったが、その後のいわき市合併や、新産業都市宣言の中、地域に大きな活力は存在していた。同級生は、480名。坊主頭と長髪が約6:4でクラスに存在していた。これはどういうことかということ、野球部が全体の6割であったということではない。浪人生が、全体の40%に達していたことを示している。中学浪人が当たり前であった地域で、全国的にも大きな問題としてとらえ、毎日新聞などが特集を組んでいた。

中学浪人といっても、一浪だけではない。同じ教室に、15歳、16歳、17歳、18歳が入り乱れているので、子供じみた言動は禁句となる。天文の動きに関心が深く、天文における恒星のドップラー効果とは何かをホームルームで解析したり、自分で作曲した水石山賛歌なる歌を口ずさみながら、合唱活動にまい進するものがいたり、アインシュタインの相対性理論の特殊と一般の違いを英語の時間に力説してみたり、変わった生徒はたくさん存在していた。時には妥協し時には挫折したが、大きなエネルギーに満ちていた。

男子ばかり1500人規模の全校集会は圧巻であった。何を話しているかが皆目見当つかないことがしばしばであった。そんな全校集会でも、全校応援練習での真剣さや、甲子園への意気込みは別だった。皆甲子園出場は、3年に1度は必ずあると心から信じて疑わなかった。事実、昭和38年に初出場したのち、昭和50年まで5回の夏と2回の春に出場したのだから、3年どころか、2年に1度

は甲子園に行っているのだった。

こんな世代の私たちの神話は、令和の今まで、一つ一つ姿を消した。右肩上がりの経済成長からオイルショック。バブル経済破綻と長びくデフレーション。三世代同居の家族から核家族化と、それぞれの時間が少しずつずれていく家庭生活。温かい家庭生活から様々な角度から可能性が広がって実は瓦解しはじける人間関係。有名大学志願と有名企業への就職が表面と内実が違うことなど。情報量の圧倒的格差がある都会と地方。そして、10年に一度となり、その後、25年間行く機会を待っている甲子園。

そんなことから、磐城高校は男女共学化し、すでに15年以上の月日が流れ、30代中盤の第1期生女子たちの今をうかがい知ることができない。(私は実は心配している。)

そこから今の生徒たちやこれからの生徒たちの今を考え、新しい磐城高校を創造する時期に来ていると考える。

ノスタルジーや性差別ではない、本当に新しい磐城高校生は実はもう生まれている。男とか女とかではなく、人の今をきちんと凝視し、相手をリスペクトし、将来を考え、今の時間をきちんと受け止め、急がず悪びれず、驕らず慌てず、決して臆することなく、豪胆で緻密で冷静で、果敢に生きている新しい磐城高校生は、実はずっと昔、草野新平氏がうたった詩の中に創造されていたのである。

磐城高校野球チームに送る 草野新平

五十四五年前は自分もうたった 永い伝統の校歌は古い明治調

進学率は高いけれど、背丈は恐らく一番低い

そんな小さな君たちが、しかい豪胆で緻密で冷静で果敢で

驕らず悪びれず周章せず臆せず その精神のばねは強くはげしい

類のない不思議なチームよ さらば行け そして勝てよ

ここにその詩を掲載したが、この姿は、まさしく、今の生徒たちの姿である。

そして50年前のあの夏の甲子園の時と同じで、生徒たちはやがて、全国大会の決勝戦に臨んでいくのだ。

新しき磐城高校生に私はこの言葉を送る。「さらば行け そして勝てよ」

私はもう引退だが、この精神は魂となって長く永遠に磐城高校の中に受け継がれるだろう。新時代の磐城高校生たちよ。熱いまなざしで頑張ってください。それぞれが高い志をもって、永遠に輝いてください。心から祈り、心から応援しています。